

蓮如のおしえ

——室町の生と死——

本学教授 名 畑 崇

ただ今、文学部長の木村先生からご紹介のありました、大谷大学の名畑でございます。ご紹介で、私の話がたぶん室町時代の生死観ということになるのではないかと、ということでしたが、生死観という事柄に及びますかどうか。解りやすく室町時代の人の生き死にというところを伺ってみたいと思います。

私たち現代に生きている者は、自分の命というものを実感し、その上で自分の死というものを予測しているようにみえます。そしていま生を同じくするほかの人たちも、自分と同じように生を実感し、また死というものを予測しているだろうと思っております。そういう点で現代の私たち

は、自分も人も生と死を共感し、生き死にについて共通の思いを抱いているように考えられます。しかし人の生き死にというのは、生理的な生とか死とか、哲学的な生とか死とか、色々あるわけで、生と死は一面において社会的な現象とみることもできます。すなわち現代の日本の資本主義社会において、人々の職業、あるいは社会的地位、それらに伴うところの所得、あるいは男女の性別、若者と年寄りとかそういった社会関係によって、生き死にというものは様々な関係、様相を示しているところがあります。例えば住む家の大小、持ち家であるかないか、病氣や死に伴う病院の施設の状況、介護が行き届いて死を迎える人と独居老人で一人で病んで死んでいく人、というように生死の様相に違いがあるわけです。そういう点で生き死にという問題は、社会的な現象としてとらえられる面があります。

室町時代、蓮如の時代と申しますと今から五百年前です。中世は身分制の時代であり、封建社会であります。蓮如の時代の生死観というように、人々が一樣に共有し共感するような生と死の状況というものは考えられないわけであります。地位や身分の高い人は、それ相應の生き方を受け入れていきます。それから民衆のように社会的に低い地位にある人たちの生き死にというのは、相應のあり方があるわ

けです。また人の生き死にを歴史の上でみると、古代の律令国家時代というように、支配する理念と秩序が支えられて機能していれば、その枠内において、民衆はそれなりの生き方、死の迎え方があるけれども、中世のように全体を支える秩序の基軸が壊れていく時に、民衆の生の支えは何であり、死はどうはたらくのか、ということがあるわけです。そういうことを今日は考えてみたいと思っているわけです。

蓮如という人は、五百年前、一四九九年三月二十五日にこの世を去っています。蓮如につきましては、本願寺系統の学者、戦後では服部之総をはじめ森菴吉、笠原一男などの歴史家、あるいは山折哲雄など宗教学者によって論じられております。作家では丹羽文雄、五木寛之などにより人間蓮如というものが書かれております。そこで論じられるのはたとえば蓮如の教え、その教えを受けた門徒とそのうごき、あるいは門徒の中から起こる一向一揆と蓮如の関係、王法と仏法のことなどの観点から論じられてきています。今回は先ほど申しましたように、蓮如の室町の時代を生き死にした人たちの様相、蓮如の時代に人びとはどんな生き死にの様相を示したか。そういう中で蓮如の教えがどんな意味をもったのか、そういうことが浮き彫りにできないか

と思っております。

経覚という僧は奈良興福寺の別当、つまり長官でありました。同時に興福寺の門跡大乘院の主でした。その経覚が日記『経覚私要鈔』を残していて、室町時代の人の生き死にの様相を垣間みることが出来ます。

経覚という人は蓮如と極めて親しい間柄であったことが伺われます。経覚は九条家の出身で関白経教の子で、出家して奈良興福寺大乘院で学び、大乘院主になります。そして奈良興福寺の別当に生涯四回就任しております。蓮如とは年齢が二十歳年長でした。この経覚の母親が蓮如の生まれた京都の大谷本願寺の出身だったので、蓮如と経覚は姻戚関係にあるわけです。寺の格から申しますと本願寺と興福寺・大乘院とは大きな隔たりがあつたわけですが、蓮如と経覚は親しい間柄でありました。『経覚私要鈔』には、蓮如と交際する記事が出てきます。一四四九年頃、経覚が五十五歳、蓮如三十五歳の頃から文明五年一四七三年、経覚が七十九歳、蓮如五十九歳までのころです。

お正月やお盆の贈答、経覚が京都に上った折に蓮如がもてなして一緒に京都を案内したり、興福寺で薪金、申楽がある、蓮如が親族を伴って見物にいくとか、蓮如の父親存如が亡くなると後日経覚が京都に上って弔問して、贈物

をする。蓮如が後日にかけて応えるとか、また経覚が虫氣(腹痛)をおこすと、蓮如が聞きつけて奈良へでかけて、高貴業を届けて経覚を喜ばせるということもあります。常に二人は交信しています。経覚は大乗院主、興福寺別当という立場にありますから、身分の低い小さな寺の蓮如の境遇に配慮して、醍醐三宝院に蓮如を幹旋し幹旋料を預けるとか。また経覚は、自分の生家である九条家にも、幕府にも出入りをしておるわけです。

このように蓮如と経覚の関係を見た上で、経覚という人物いわば当時の仏教界のトップの人間について伺ってみます。歴史学で朝廷や幕府と世界を共有するシステムを保とうとする立場の大寺を、顕密寺院と呼びます。経覚は顕密寺院の代表といってもよい立場の人です。興福寺は法相宗の寺で、唯識・瑜伽という大乘仏教の根本とされる精緻な論理を通して意識や存在、存在と人間の関係、そういう哲理を追求する学派でありました。

法相・唯識を学ぶ立場の経覚ですが、嘉吉三年(一四四三年)五月の日常を伺うと様々な仏事があるわけです。

『金剛経』『般若心経』『般若理趣分』を誦す。『大般若経』『法華経』『観音経』など経を読みます。それから呪、陀羅尼といつて、インドの言葉で仏の心を誦すわけです。

「薬師呪」「普賢延命呪」「十一面呪」「地藏呪」「如意輪呪」など。それと真言の十八道加行とかです。法相宗の僧侶ですけれども、真言宗の修法がたくさん用いられています。

それから神社の神々を拝する。伊勢神宮の崇拜、天満宮の法楽、春日若宮祭りだとか武家八幡だとか。こういう神拝を月例として行っておりま。

それから自分の為の事としては、逆修。死後、一七日とか七七日というふうに七日毎に追善を営み、生きている間に死後の供養をするのが逆修です。そして法相宗でありながら、後世の引導、悪所に趣かないで西方極楽に行けるように臨終正念して不退の土、浄土に参りたい、というような祈願をしています。

それから親族など身内の追善を命日ごとに営むわけですが、父・九条経教や大谷本願寺の出身であった母の命日の勤め。大乘院の亡くなった先代など、あるいは自分の出身である九条家の人たちが大体大乘院に入る習わしだったので、それらの人びとの追善です。それと足利義教の追善を嘉吉三年六月二十四日以来続けています。足利義教は、嘉吉元年六月二十四日に暗殺をされたわけですが、その後ずっと大乘院では將軍義教の追善を行うのが恒例になってい

ます。

それから恒例念仏六万反。毎月十五日に行く。経覚はこれにこだわっていて旅先でも行いますが、忘れて怠ったということになる。「業障のいたり、うらみてもあまりあり」とひどく落ち込んでおります。ほかに融通念仏千二百反、地藏名号を称えるのを恒例にしています。

それから嘉吉三年五月厄病よけのために、井戸水で水浴をしています。あるいは月食があつて、不吉で闇の夜のようになつた。不吉を予防するために陰陽師を頼むべきであつた、と嘆いたりしています。法相宗で唯識を学ぶ権威ある僧が吉凶、災厄を恐れて、陰陽師の占いや祓いを事とする人々を頼んでいます。

以上は経覚の嘉吉三年五月の事例ですが、このような行事が二十年間にわたって営まれていたのです。大乗院経覚が生きているというのは、こういうことだったので。このような行為が一言でいうと生を守つて死を防ぐということ。そういうことで経覚の生涯は満たされている、ということになります。

当然これらには費用を要するわけで、それを支えるのが大乗院の荘園。興福寺大乗院は奈良一國だけで九百町の土地があり、全国で三十カ所の荘園がありました。それら土

地・荘園によって大乗院は運営され、仏事が営まれるわけです。たとえば、越前国河口の荘が大きく、のちに本願寺蓮如が荘内の吉崎に御坊を建てることになりました。

さて経覚の地位は、九条家の出身ということ、将軍が大乗院主・興福寺別当たることを承認し、不祥事でもあると、将軍がそれを辞めさせるといふ進退の権限を握っていたのです。

次に経覚の身边を伺つてみます。まず不祥事・災厄を防ぐため、悪夢をみるとすぐに祈禱をします。仏教による祈禱。それから陰陽道の鬼気祭。陰陽師に頼んで災いを防ぐ。鬼病の払い。死者、迷界から災いを及ぼす目に見えない鬼神にとりつかれたかと思われる不思議な病気で鬼病といいます。その鬼病払い。あるいは邪病、原因の解らない人に伝わつて病気を起こす。それを防ぐ秘術とされたのが釈迦念仏「南無釈迦牟尼仏」を唱えると病気が防げると信じられていました。あるいは唯識三十頌というのがありますが、これは唯識学根本の聖典とされるもので、これを唱えると病気を逃れるとか、雨乞いに唯識三十頌をよむと日照りがやんで雨が降ると信じられていました。

疫病にかかつて死んで「黄泉」に赴くといひ、思いもかけぬことにより、無駄に死ぬのを「犬死」といっています。

それから経覚の身辺の者の様相としては、父母の命日の勤め、亡くなった師匠の日の勤め、あるいは側近く仕える者の妻の死に同情して「愛別離苦」という言葉を記していたわっています。あるいは身分の低い力者といわれるような者の母親が死んだことを「死去」と。また興福寺か大乗院に専属の医師がいたらしくて、その者が死んだ場合には「卒去」。医者としていた者ではなかったけれども、人柄はなほだ穏便であったと書きつけています。

それから興福寺は莊園領主ですから、莊園を経営し管理し維持するために、武力をもっているわけです。いわゆる六方衆だとか僧兵をかかえていました。したがって合戦もありませんし、幕府の命令によって河内の畠山義就を討てと加勢を求められたり、経覚はその命令を取り次いだり、興福寺からもなにかの兵を派遣するという立場にあります。経覚自身も合戦に出馬しまして、味方の者が敵を殺害したとか、あるいは味方の者が討ち死にをしたとか。それから河内に畠山義就が城に立て籠り、それを同族の畠山政長らが攻めるわけです。そこで激しい合戦があつて、首級死者の首がたくさん京都に送られていく。その河内の合戦において、経覚の従者の彦三郎が討ち死にをした。戦が終わってから安否を気遣い彦三郎の下部が戦場に行った。と

ころが敵方に捕まえられてしまう。自分は遁世者、つまり出家者で、頭を剃り衣を着ているものだから、助けてくれ、と命乞いをする。手をすり膝をもすつて哀願したけれども、相手は許さないで無残に踏み殺されてしまったと伝え聞いて日記に書きつけています。

身分の高い人の死ということでは、將軍家の死という点からうかがってみます。時の將軍は足利義政です。義政が寛正二年正月十八日に不思議な夢をみた。義政の父、六代將軍の足利義教が嘉吉元年六月二十四日に赤松満祐の屋敷で暗殺されたわけですが、その義教が息子の義政の枕元に正月十八日に立つのですね。義教は左大臣にまで昇つておりましたから束帯をつけている。夢の中で義教が義政に言うことには、自分が將軍在職中に悪事をたくさん働いたために今、苦しんでいることはひとかたではない。しかしながら若干善いことも沙汰をした。將軍として善いことも指示をした、と。それで、また人間になつて將軍家に生まれる望みがあるから、去年から今年にかけて飢饉が襲つて飢えている大勢の人びとに施しをして欲しい、と頼んだのです。それで義政が幕府の直轄寺院である相国寺へ出掛けたり、飢えている人達に食物を与えるよう下達して、京都の町で慈悲行、施食が展開されることになります。その

ことを伝え聞いた大乘院経覚は、大変喜んで「有難き御夢なり」。将軍がそんな夢を見たことは有難い御夢であり、多大な利益だ、と。しきりに義政の夢を褒めております。将軍義教の死にざまと亡霊と、その償いとしての施食・給銭が話として伝わっていたわけです。

生き死にということは、生き死にの実態ではなく話として伝わり、書かれ、言説としての死や生が受けつがれていく。現代でもそういう部分があります。言葉によって、言説によって、生きるとか死ぬということを受けとめ、生を無駄にし、生を損なったりするところがあるのではないのでしょうか。

伏見宮の『看聞御記』という日記がありますが、嘉吉元年六月二十四日の将軍義教の死の現場を伝え聞いて書き留めています。能狂言の最中に物影から躍り出た武者によって義教は首を討ち落とされる。討ち落とした首を赤松満祐が取って領国の播磨へ逃げ帰ります。京都の赤松邸は火を放ち、焼け跡から遺骸を見付け等持院に葬ると。伏見宮は将軍「犬死」と書き留めています。こうして将軍義教が殺された。殺された義教が子息義政の夢枕に立ったという話が身分の高い人々の間に広がる。そういうことで室町幕府の権力の実態というその弱まりと、それを軸に支えられる

公家や武士たち、顕密寺院の状況がこの辺のところにあられているといえます。

もう一つ例として将軍義政の御台所・日野富子の死産があります。富子の出産に際して安産祈禱をするわけですが、これは古来貴族社会の慣例でした。けれども富子は死産でした。将軍の寵愛を得て権勢のあった今参りの局が呪詛したためということでした。安産の祈願調服法には、災いをかけようとするものに対抗して抑えるが、調服にあたった者が面目を失ったという話があります。こういうところにも将軍家の生と死にまつわる状況が伺われるように思います。

次に顕密寺院、つまり延暦寺・興福寺・東大寺をはじめ、醍醐寺・仁和寺など格別の寺々。宮廷や幕府と関係が深く、経済基盤としての荘園や土地をたくさん所有してきた寺々の僧侶はどのような生き死にの境涯にあったか。その一人として大乘院経覚をめぐる寺僧の死というところで何ってみることにします。僧正というと、ひじょうに高い身分ですが、僧正兼昭の死を「逝去」という。もつとも、身分の低い人達も「逝去」と書いておりまして、死を表わす言葉についてまだよく分析できておりません。ともかく僧正兼昭が逝去したが、世間では飢死だとか、服毒自殺ではない

かといううわさがあると。

それから、北面の僧良重の死。これも経覚と関係のある僧侶ですが、これも「逝去」したと。しかし良重の場合「鬼病」つまり鬼神がおこしたとみられる不思議な病のために死んだので、お葬儀には弔問しない。経覚は法相宗の僧であつても会葬を忌避しています。

それから西南院僧正重覚という者が赤痢で死んだ、これも「逝去」といつております。

それから大乘院門跡の侯人、つまり身分の低い者が死んだことを「卒去」。それから先に死亡した玄兼という僧が、継舜という僧の夢に現われた。それも正月の十八日のことで、死んだ僧侶が、僧の夢に出てきたというのでひじょうに不吉だと言われています。しかも夢で死んだ僧侶が自分の自坊を訪れてきた。どうしてあなたは此所へ訪ねてきたのかと問うと、これから人を連れ立ちに来たのだと言う。ひじょうに気持ちが悪いですね。継舜は年の始めから縁起が悪いというわけで、祈禱をはじめています。

それから僧正貞兼という者が病気で死んだ。貞兼は大乘院院主になったことがあり、経覚とほぼ同世代の人物です。この貞兼が病気で治療を施し、種々祈禱したが及ばなくて他界をした。

ところで貞兼僧正の死について次のようなことが語られています。貞兼僧正が死にかけている時、ある僧が夢をみるのです。貞兼僧正の住坊松林院門前に、軍勢が押しかけている。その中で立烏帽子をかぶっている主だった人物に、一体どこへ向かう軍勢なのかとたずねると、貞兼の住んでいる松林院へ寄せて行くところであるという。一体どこから来た軍勢なのかと聞くと、大將は先に死亡した舜観僧都でこれから貞兼を召し捕りに行くところだという。そして夢から醒めたという。こういう夢の話を経覚が書きとどめた後で、貞兼僧正はきつと魔界に墮ちるに違いない、かわいそうに。「不便、不便」ということを記しています。さらに貞兼について次のように評しています。貞兼僧正は随分修学研鑽の人であると。興福寺に入つて勉学に励み、南都に並びない学問僧であつたけれども、道心がなかつた。彼は伊勢貞行という幕府に仕えた侍のせがれで、良家の出身ではなかつた。それで足利將軍義持の口利きでいったん、広橋家という公卿の猶子になり、光雅僧正の弟子になった。卑しい身分の出身でありながら、高官についたために冥加がなくて五十歳で早世したのだと。蓮如はその時三十八才でしたが、経覚を通してこうした話を聞いていたに違いありません。

同じ時期に中風で死んだ清寛という僧の葬儀があるので、その葬儀の日に大雨が降って、大風になってしまうのです。そのことについて経寛は清寛は穏やかな人柄であったけれど、兄の光宣律師が悪逆無道の者なので、一家の者がこのような目にあうのだと評しています。

それから整理してみましたのが下部の死。下部というのは寺院や公家・武家に仕える身分の者というほどの意味合いです。下部の死ということでは、東大寺と興福寺との戦いで東大寺側の討死にした者が十人余りあるとか。あるいは延暦寺の末寺多武峯と興福寺が合戦を繰り返して、多武峯の法師とそれに従うものが十一人討たれた、という話。

それから和泉の国で山臥が二人殺害された。それに抗議して全国の山臥が諸国で群集をする動きのあることを記しています。これは「殺害」といわれています。

それから下部とか、若党あるいは下級の僧侶の日常の喧嘩とか、酒を飲んだ上での事故による死を「失命」。あるいは首を切る、頸切、切り殺す、切腹など。喧嘩による半死半生、酒に酔い、酔狂のために「切誅」という表現。

これらは身分の高い経寛から見た下部たちの死であって、書きとどめた経寛自身の世界と、下部の生き死にの世界は別のことであるというような見方ができるだろうと思いま

す。

次に下輩の死。下輩というのは卑しい身分の者で、今日の民衆という言葉にあてはまると思います。民衆の死というものはどういふふうにとらえられていたかということです。大勢の人びと民衆が死んで行く場面というのは、病氣、飢饉です。たとえば宝徳二年と康正三年の飢饉と病氣の様相です。宝徳二年に洛中の病人が道にあふれ、道路ごとに二十人臥せていると。死人も多くその中に混じっていて、都と田舎で病死者の数は数えきれないほどである、と記しています。

それから大乘院の奈良の所領で赤痢により多くの人びとが逝去した、下輩のものが一郷で子供と老人四十人が死んだと。

この頃土一揆が起きていることも経寛が書き留めておりますが、土一揆を討つため幕府が遣わした軍兵により、一揆側が討たれる、というような記事もあります。それから一番大きな飢饉は寛正二年、寛正二年の前年は長祿四年で、長祿四年から寛正二年にかけて大飢饉が京都を襲って、寛正二年正月から二月にかけて二ヶ月間八万二千人死んだ、という記事があります。

京都で乞食が数万人いる。室町殿が一人宛に銭六文ずつ

給したけれど、余りにも人数が多いため一日、二日で銭が尽きて打ち切られたと。乞食が町々で死亡して、その数を知らず。日夜、飢死する者を処置することもなく、一条より南、九条より北、朱雀大路より東、東京極より西、すなわち洛中に死人があふれていると。去年長祿四年冬から今年寛正二年春までに、洛中の死者は幾千万ということをやわずと。そういった人達に施行、食物を与えるのですが、与えようとたちまち死んでしまう。飢えの極限にある者に一度に欲しいだけ与えると、すぐに死んでしまうわけです。多くの民衆が死んでいく状況に対して、経覚はこう評しています。彼らの死はただ業の感じるところである。前世の爲した行為、業の爲すところであって、こんなような悪い時代に生まれあわせて、毎年飢饉のためにこういう災いを被るのだと。それは彼らの悪心の結果であって、致しかたの無いことだと言い「無力の次第」と評しています。

そんな中で願阿という僧が救援に当たっているけれども、彼の弟子も病気にかかって死んでいくような状態である。そういう状態が洛中に展開している中で、経覚が書きつけているのは、流行り歌にして世間に広がった言葉らしいのですが、飢饉で施しをするのは、慈悲行だというけれど、卑しい身分の者に生まれあわせ飢死するのはひとえに業、

その者の過去の行為の感じるところである。業力によって飢え死にすることが償いであるから、そういう者に対しては施し、慈悲を行うことは仏神の意思に背くのだと。こういうことが歌にのせて流されたというのです。こういう発想はどういう立場から出たのでしょうか。経覚が先に言っていたことと通じるころがあるわけですけれども、そういう立場と近いところに経覚がいたことになりました。

最後になりますけれども、蓮如の死についてのことです。蓮如は明応八年三月二十五日に命終します。グレゴリオ暦によると、この年の三月二十五日は太陽暦の五月十五日ということですから、そうすると、今日まだ蓮如は生きています。蓮如は死去したということになります。(講演会は四月二十二日) 来月の中ごろになって蓮如は死去したということになります。死去した蓮如の終焉について書き留めた『空善記』という記録があります。蓮如の弟子空善が書き記したものです。

蓮如は明応八年二月まで大坂で隠居しており、大坂で命終したいと思っていたわけで、葬儀の準備までしていたようです。ところが、山科本願寺の後を継いだ実如より、是非山科で終わってほしいという要請があり、蓮如はやむなく輿に乗せられて山科へ移ったわけです。

そして二月二十七日、蓮如は山科本願寺の影堂に参詣し

て、大勢集まった門徒たちに名残を惜しんでいます。

三月三日、蓮如は再び親鸞の影像を安置する御影堂に参拝し、親鸞に別れの挨拶をしております。

そして三月十日に歌を詠んでおります。「八十地五つ
定業きはまるわが身かな 明応八年往生こそすれ」また
「我しなば いかなる人もみなともに 雑行すてて 弥陀
を憑めよ」。そして「此後は御歌もなかりき」と記されて
います。

三月十八日になって子息たちを集めて、「我亡き後、兄弟たち仲よくかれ」と。自分がこの世を去った後、兄弟たちで仲良くしておくれと。ただし親鸞の教え、信心を共有するならば、自ずから仲も良くなって、親鸞の教えも世に広がるであろうよ、と話して聞かせています。

明くる日の三月十九日には、蓮如はもう薬もいらぬ、おもゆもいらぬと言ひ、念仏するばかりで早く往生したと願っているようであった。

そして三月二十五日の正午、いかにも眠るようなご臨終であったと記されています。これは山科本願寺で弟子の伝えた情景ですが、それを京都の公家が聞きつけて記していません。

同日三条西実隆という公卿が日記『実隆公記』に「山科

法印一向宗、今日入滅」と。山科法印一向宗とは蓮如のこととで、入滅というのは釈迦が亡くなったことに準じ、その死を「入滅」と記しているのです。僧侶の死を敬って呼ぶのです。

そして三月二十五日の夕刻から山科本願寺の御影堂に蓮如の遺骸を移して、集まった門徒に最期の別れをしています。そうするのが蓮如の遺言だったようで「数万人」が集まったといひます。

明くる二十六日が葬儀になります。はじめ四月二日に葬儀を予定したわけですが、急に変更して二十六日に茶毘ということになりました。察しますと、蓮如ほどの人の葬儀になると話が諸国に広がり、大勢の人が山科に群参して、関所や途中の道が混乱する。人が群集すると幕府や守護・地頭がひじょうに警戒しますから、混乱をおそれて急に早めたのではないでしょうか。

明けて二十七日、朝になりますと骨拾いということになるわけです。本願寺の後嗣実如が最初に収骨し、次々と順番に行い、最後に門徒の人達も火葬した跡に群がり、土や石まで掘り起こして国々に持ち帰ったといひます。

二十六日の葬儀のことですが、これも空善が書きつけています。蓮如の葬儀の時には、親鸞の『正像末和讃』の中

から三首が選ばれています。「無始流転の苦をすてて 無上涅槃を期すること 如来二種の回向の 恩徳まことに謝しがたし」。蓮如自身、余命いくばくもないと覚えて、念仏の合い間にこの和讃を口ずさんでいたのではないでしょうか。それについて「南無阿弥陀仏の回向の 恩徳まことに不思議にて 往相回向の利益には 還相回向に回入せり」。最後が「如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし 師主知識の恩徳も骨をくだきても謝すべし」。いずれも如来回向の「恩徳」をたたえるものです。蓮如の死は「無始流転の苦をすてて 無上涅槃を期すること」。すなわちこの上無い涅槃の境地に到達することを確信することだったのです。

そうであるならば、当時の民衆は蓮如の教えを聞いて生き死にする。蓮如の終焉から葬儀、収骨を通して蓮如とともに民衆が生死を共感し「無上涅槃を期する」という。いかえると、民衆が蓮如とともに往生を遂げて行つたと。そういうことが、蓮如という現象であったというように言えるのではないかと思っているわけです。

ご静聴をありがとうございました。